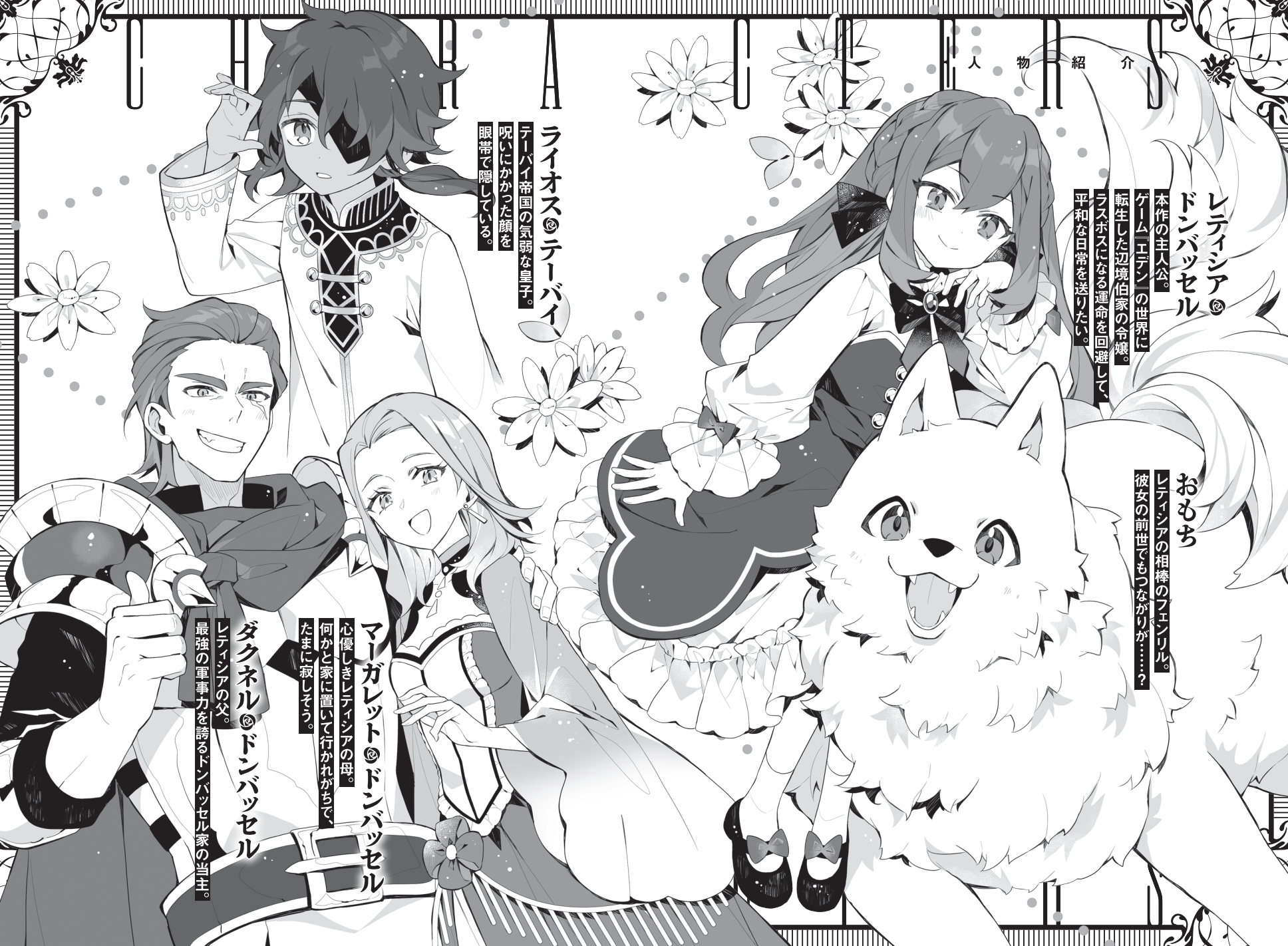
厄災の悪役令嬢

レティシア・ドンバッセル

大福金 Daifukukin

illust. ririto

Leticia Donbassel
the villainous daughter of disaster


CHARACTERS
人物紹介
レティシア・ドンバッセル
本作の主人公。
ゲーム『エデン』の世界に
転生した辺境伯家の令嬢。
ラスボスになる運命を回避して、
平和な日常を送りたい。
おもち
レティシアの相棒のフェンリル。
彼女の前世でもつながりが……？
ライオス・テーバイ
テーバイ帝国の気弱な皇子。
呪いにかかった顔を
眼帯で隠している。
マーガレット・ドンバッセル
心優しきレティシアの母。
何かと家に置いて行かれがちで、
たまに寂しそう。
ダクネル・ドンバッセル
レティシアの父。
最強の軍事力を誇るドンバッセル家の当主。

★ラスボスに転生!?

とうとう魔王城に来た。あとはもう、やるしかない。やるしかないんだけれど。
厄災の魔王の覇気に当てられ、震えが止まらないし、正直怖い。
今、私の目の前には、最強と恐れられている厄災の魔王が、鎮座している。
『あるじぃ、大丈夫っち？』
私の緊張が伝わったのか、相棒である最強フェンリルのおもちが心配そうに私を見つめる。
弱気になってどうする。私は最強の悪役令嬢レティシアなんだから！
「大丈夫！　おもち行くよ！」
『まかせろっち！』
――厄災の魔王、その力いただきます！

★

――四年前。

誰かが私を呼んでいる？
なんの声？　目をこすりながら開けると、
「レティ！　良かったー……目を覚ました……ぐすっ」
はぇ⁉
何が起こってるの？　目を覚ますと、大勢の人が私の周りに集まっていた。
しかもみんな涙目で私を見ている。なんで？　この人たちは誰⁉
私――ん？　あれ？　誰だっけ？
そうだ、『レティシア・ドンバッセル』。これが今の名前。
今の？　今ってどういうこと？
「あーーっ‼　思いだちたっ！」
「レ、レティ、急に起き上がって大丈夫なの？　今さっき目を覚ましたばかりだけど……」
ガバッて言葉がピッタリな勢いで、急に起き上がった私に、みんなが驚いている。
泣きながら私のことをレティと愛称で呼ぶ綺麗な人は、私の母――マーガレット・ドンバッセル。
「そうだぞ、二日間も目を覚まさなかったんだ。急に無理したらダメだ」
母の横に立ち、オロオロと心配しているのが私の父――ダクネル・ドンバッセル。
「レティ！　良かった」
「急に起き上がったりしちゃダメだよ」

「ほんとだよ！」
「目を覚ましてくれて良かった」
さらには四人のお兄様たち。
みんなが私を心配している。
――全て思い出した。
私は転んで噴水の角に頭をぶつけ、二日間寝込んでいた。
どうやら頭をぶつけた拍子に、前世の記憶を取り戻したようだ。
そのせいで現在脳内がぐちゃぐちゃで、レティシアと前世の記憶が混沌としているけども。
前世の最後の記憶。
確か……仕事帰り家に戻ると家が轟々と燃えていて、家の中に残されていた愛犬おもちを救おうとして、燃えている家に入っていったんだ。
そこからの記憶がないってことは、その時に私は死んだのだろう。
愛犬のおもちはどうなったんだろう。
気になることが多すぎて、いろいろと頭を整理したい。
なんだけど、周りにこんなにも人がいては、整理できるものもできない。
どうやって……そうだ！
「あにょ、ちょっと横になりまちゅ」

私は再び横になり、疲れてますアピールをする。
さすがにゆっくり寝かせてくれるはず。
「そうだな。目が覚めたばかりだもんな。いきなり騒がしくしたら疲れるな」
お父様が私の頭をふわりと撫でる。
「ゆっくり休むのよ」
お母様が私を優しく抱きしめる。
今世の私はみんなから大切にされ、愛されているようだ。
前世の私は孤児で、本当の親の温もりを知らない。子供の頃から人の顔色ばかり気にしていた。
無条件で愛されてるって幸せだな。なんだか顔が綻ぶ。
家族が部屋を出ていった後、頭を整理するために紙とペンを用意し、机に向かう。
今の私は二歳。鏡で見るその姿を一言で表すなら、愛らしいしかない。
真っ赤に燃えるような艶のある髪の毛。真珠のように艶々で真っ白なお肌。見た目チートすぎる。
だけど、気づいてしまった。
この美しい姿に、レティシア・ドンバッセルという特徴のある名前。
前世で何度も何度も見たし、聞いた。
そう……この世界が、前世でめちゃくちゃハマったゲーム『エデン』であると。
最強との呼び声高いドンバッセル辺境伯。エンディバン王国の要だ。隣国からの攻撃や、近くに

ある深淵の森から溢れる魔獣たちを討伐し、全ての脅威から国を守っている。
エンディバン王国随一の強さを誇るのが、このドンバッセル領。レティシアの家族である。お父様やお兄様たちもみんな強い。
だけれど、最強がこの私。厄災の悪役令嬢と呼ばれるレティシア・ドンバッセル。
このゲームのラスボスである。
『エデン』をクリアするにはこの最強集団ドンバッセル家を倒し、最後に待ち構えるラスボスであるレティシアをも倒さなくてはいけない。
どうにかドンバッセル家を倒せたとしても、後ろに控えるレティシアが強すぎて倒せない。とにかくこのゲームは無理ゲーなのだ。
ＳＮＳでも一時「#レティシアが強すぎて無理なんだが。」が流行ったほどに、誰もレティシアを倒せない。
クソゲーと言われてもおかしくないこのゲーム。なのに大流行した。
その理由の一つが、無理にレティシアを倒さなくても楽しめるということ。
ゲームの始まりは魔法学園入学。その時に自分のキャラクターをクリエイトするんだけど、職業を戦闘職にしなくても良い。
好きな職業を選び学園に入学できる。
学園では戦闘の授業以外に錬金術だったり、生産だったりといろんな授業があり、自分が学びた

いものだけ選んで受けることができる。
そこで覚えた魔法や技術を使い、在学中に冒険者になったり、自分のお店を出しても良いのだ。
魔法学園で、自分の職業に合った様々な訓練をしながら、好きなことができるというのが流行った一番の理由。
ドンバッセル領にさえ行かなければ、最強集団と戦う必要はないのだから。
このゲームを遊んでる人で、ラスボスレティシアを倒そうなんて考えている人は、もういないだろう。
そんなラスボスレティシアに私が転生!?　ありえない……
とりあえず私はラスボスになりたくないし、知らない誰かと戦いたくもない。
というわけで、ラスボスルートに入らないために、今覚えている前世の記憶を忘れないよう紙にメモる。そして、ドンバッセル領で静かに暮らせるように努力することを決意した。
一番の問題点は、なぜレティシアがラスボスになるのか。
トリガーは婚約破棄。
第二王子であるエリックのことが大好きだったレティシアは、婚約破棄されて闇堕ち。身勝手に婚約破棄した第二王子に対し、レティシアを溺愛する家族も激怒し、ドンバッセル領の精鋭達VSエンディバン王国の戦いが始まる。
この戦いが始まらなければ、私はラスボスにもならないんだけれど……う～ん、どうしたら。

「あっ！」
これって、婚約破棄されても私が闇堕ちしなければ良いわけで……あれ？
「もう問題解決!?」
確か設定では、第二王子との婚約は六歳だったはず。
よし、私は成長しても第二王子のことなんて好きにならないし、それだけ強いのなら自分で決めたようにシナリオを変えることもできるだろう。そうやって婚約破棄や断罪イベントをやり過ごした後のやりたいことリストも作らなきゃ。
ラスボス転生。最悪かもと思ったけれど、うまくやれば最高かもしれない。
前世では仕事に追われて、何も好きなことができないまま終わった人生だった。
今世ではラスボスだけど、好きに生きるんだ。食べることが大好きだったから、美味しいものを食べ歩きしたいし、いろんな国にも行ってみたい。好きな野菜を育てて自給自足もいいなぁ。
「ふふっ」
考えたらワクワクしてきた。ゲームスタート前のレティシアのことは、全く分からないけれどいける気がする。
扉がノックされた。
私は書いていたノートを隠し、急いでベッドに戻る。
メイドが扉を開くと、

「レティ、夕食の時間なのだけれど。体調はどうかしら？」
「いししっ、今日はねー、お肉スペシャルだよ」
「食べよ」
お母様と、双子の兄リンネ様とネイト様が部屋に入ってきた。
次男リンネ様の髪色は金色で、三男ネイト様は蒼い髪色だ。お母様と同じ蒼なんだけれど、お母様の髪色は水色に近い。
二人の性格は真逆のようだ。リンネお兄様は陽気な感じで、ネイトお兄様は寡黙で口数が少なく表情が読めない。
「げんきになちゃ！」
三人に向かって力こぶを見せ、元気アピールをする。
次の瞬間。ギュルルルルルッっと私のお腹の音が盛大に鳴り響く。
「あうっ」
恥ずかしくて顔が火照る。このタイミングでお腹の音が鳴るとか……私、神がかってる。
「あはははっ。レティったらお腹が空いたんだね」
「良かったわレティ。元気になった証拠よね。さ、美味しいご飯を食べましょう。みんなが待っているわ」
「行こ」

二歳児でよかった。恥ずかしすぎるこの状況、全く気にしてない様子でお母様は私をベッドから抱き上げると、そのまま夕食会場へと連れていってくれた。
私たちが到着すると、他のお兄様たちやお父様は席に座っていた。
「レティの席は僕の隣だよ」
私の席は一番末の兄、四男ジュエルお兄様の隣のようだ。大きな瞳に癖っ毛の緑色の髪色が愛らしい。
少し高めの子供用の椅子に着席すると、「元気そうな顔が見られて良かったよ。弱った体にいきなり塊肉は無理だろうから、スープを用意したよ」とお父様が言い、私の前にそれが運ばれてきた。
「今日も美味い飯が食べられることを軍神様に感謝し、飯を食べよう」
軍神様？　お父様のちょっとおかしな挨拶を皮切りに、みんなが一斉に食事を始める。
目の前にどんどん大きな肉塊が運ばれてくる。
ななな？　この料理は一体……
お父様もお母様も、それにお兄様たちみんなも、大きな漫画肉にかじりついている。
一応フォークとナイフを使っているけれども……
すごい食事だな。海賊飯みたいだ。みんなの食欲のすごさに呆気に取られ、目の前に置かれたスープを飲むのを忘れていた。

とりあえず、これを飲みますか。ゴクッと口に入れると……う～ん、なんだこの味。ものすごく微妙。味つけは塩と胡椒だけ？　小さく切った肉と野菜……野菜や肉からいい出汁が取れていない。脂ぎっている。灰汁も取ってない。なんでこんなに食のレベルが低いの？

「あっ！」

そうだった。この世界って、料理レベルをわざと低くしてるんだった。

「うん？　どうしたのレティ？」

急に声を出したから、隣のジュエルお兄様が不思議そうに私を見る。

危ない危ない。気をつけないと。つい思ったことが口に出ちゃう癖。前世でも『心の声が出ちゃってる』って友達から注意されてたな。

「シュプ、おいちい」

「ふふっ、なら良かった」

誤魔化すようにジュエルお兄様に向かって微笑む。

この『エデン』の世界は、戦闘だけじゃなく、料理したり薬草採取したりと、いろいろと楽しめるようになっていて、料理があまり美味しくない。あえてそう設定しているのだ。

傷薬であるポーションだって、レベルの高いものは販売しておらず、ダンジョンで入手するしかない。なので高クオリティのハイポーションを作って稼いでいる人だって大勢いた。

他にもいろいろな香草を駆使し、美味しいカレーを作って人気カレー店を経営している人もいるし。『エデン』の世界は、いろいろな無双を楽しめるように、全てが最低のランク設定なのだ。

レティシア率いるドンバッセル領の強さだけは例外なんだよね。

よし！　私もこのドンバッセル領で食事の改革をする。

とは言ってもまだ二歳。自分で作るなんてまず無理。ちゃんと喋れないから料理長に作ってもらおうにも、上手く伝える自信がない。

えーん、当分はこの料理で我慢するかぁ。

★ハンバーグ革命

来週は三歳の誕生日。この世界では三歳になるとスキルが得られる。この時にレティシアは最強になれるレアスキルをもらうのだ。

記憶を取り戻してから半年が経った。この小さな体にもだいぶ慣れてきた。

初めは体を動かすことさえかなり難しかった。

小さな体って、何をするにもこんなに大変だったんだと、改めて理解する。

今日は目標であった、美味しいご飯への改革を決行しようと思っている。

「にちちっ！　料理ちょにつくてもらうんだ」

何を作ってもらうのかは決めている。
そ、れ、は……大人も子供も大好きなハンバーグ。
こっそり調理場に行って調味料などを確認したら、塩、胡椒、醤油、砂糖、お酢などの基本調味料は揃っていた。あとは少しの香草。
この世界の料理は良い言い方をすると、素材の味を活かしている。だけど、それだと飽きるんだよねー。前世でいろんな美味しい料理を食べていたから。
ケチャップやマヨネーズなんかは簡単に作れるから、それらも増やしたいところ。
とりあえず今日はハンバーグと、あとはケチャップを作って美味しいソースも作るんだ。
にしし、楽しみー！
「レティどうしたの？　ニコニコしながら歩いて」
「ジュエルにいしゃま！」
調理場に向かう途中、四男のジュエルお兄様とすれ違った。
他のお兄様たちは剣と魔法のお稽古中なんだけど、ジュエルお兄様はまだ六歳なので稽古中は自由時間なのだ。
七歳から始まる稽古をジュエルお兄様は心待ちにしているようで、お兄様たちの稽古をよく一緒に覗きに行っている。
前世で大人だった自分からしたら、兄たちは全員小さな子供。それをお兄様と呼ぶのにも初めは

抵抗があった。まぁさすがに慣れたけれど。
お兄様たちは私を溺愛してくれて、可愛がってくれるし。
前世で無条件に愛されるなんてことなかったから、嬉しい反面むず痒い。
「今から調理場に向かいまち」
「え？　調理場に？　何しに行くの？」
「料理ちょに用事があって、やくしょくしてるの」
「ええ？　料理長と約束？　気になるなぁ、僕も一緒に行く」
なんとジュエルお兄様がついてくることになった。
二人で仲良く調理場に向かうと、料理長がすでに待機していた。
「おお、ジュエル様もご一緒で」
「うん。そこで偶然レティに会ってね。僕もついてきたんだ。二人で何をするの？」
「レティシア様から料理の相談があると言われまして」
「料理の？　そうなのレティ？」
「あい！　新しゃく料理をちゅくってもらいたいんれす」
私がそう言うと二人が声を合わせて驚いた。
「「新作料理!?」」
「あい、料理ちょは私が言うとおりに料理をちゅくってほしいんれす」

「レティシア様の言う通りにですか……」
料理長が複雑な表情で私を見つめる。まぁそうなるよね。
二歳の子供の言う通りに作れって、令嬢のおままごとに付き合わされるようなもんだもの。
「まぁ、料理長。作ってみてあげてよ。レティに何か思いつきがあるんだよね？」
「もちろんでち！」
「ジュエル様までおっしゃるなら……分かりました。作ってみましょう！」
ジュエルお兄様が後押ししてくれるなんて！　グッジョブです。
まずはトマトケチャップから先に作ってもらおうかな。煮詰めたりしないとだし。
私は奥に並べられている野菜から必要なものを取り、テーブルに並べる。
スパイスが欲しいところだけれど、ないからそれは諦めよう。
「料理ちょ、このトマトを細かく切っちぇお鍋でにちぇ、このニンニクとタマネギはスリおろちてくだちゃい！」
「はぇ⁉　すりおろす⁉　レレッ、レティシア様。そんな料理の工程をどこで……⁉」
「ひらめいちゃんでち。そのあとザルでこしてくだちゃい」
驚きつつも言われた通りに料理長は工程をこなしていく。
「トマトの中にニンニクとタマネギも、ちゃらに砂糖と塩も入れて煮詰めてくだちゃい」
「ははっはい！」

ジュエルお兄様はワクワクしながらその一連の作業を見ている。あとはお酢を入れたら完成。
「完成でち！」
真っ赤に煌めくトマトケチャップが目の前に！　んふふ。どれどれ味見。
料理長からスプーンを受け取り、三人同時にトマトケチャップを口に入れる。
「うんまぁぁぁぁぁぃ」
「おっ美味しい！」
「ここっ、これはなんて旨味！　トマトの味に奥行きが……これは味の革命！」
料理長はスプーンを握りしめて、なんだか大興奮している。
「レティシア様は天才ですか⁉　こんな料理を思いつくなんて」
瞳を輝かせ、料理長は私を大絶賛してくる。
だけど本番はこれからですよ？
「料理ちょ。次はメインのおにきゅ」
「はい！　お任せあれ」
「このおにきゅを細かくミンチにしてくだちゃい」
初めは半信半疑だった料理長も、さっきのトマトケチャップで信頼を得たのであっという間にハンバーグが完成した。
「こんな肉料理、初めて見たよ……」

「ジュエル様、私も同感です。早く味見がしたいです」
「まだまだでちよ！　仕上げのソースを作りまち」
「あの赤いソースはまだ完成じゃない⁉」
「あれを使って仕上げるんでち」
「なんと！」
バターを溶かしてトマトケチャップと醤油を投入し、混ぜ合わせる。そこに赤ワインを入れて少し煮詰めたらソースの完成！
「これをさっきのおにきゅにかけてかんちぇ」
「なっなんて食欲を誘う香り！　早く食べましょう」
「うん。こんな美味しそうな香り、たまらないね」
フォークを取り、再び三人一斉にハンバーグを頬張る。
「うんまぁぁぁぁい！　こりぇこりぇ」
「美味しっ、僕こんなに美味しい料理初めて食べたよ」
「私もです。感動して涙が溢れて止まりません」
ジュエルお兄様は「美味しい美味しい」と、ハンバーグを口に入れている。料理長に至っては「味のハーモニーに感動です」と言って、ずっと涙を流しながら咀嚼している。
なんだか嬉しいな。美味しいの共有は、幸せを分け合っているみたい。

「レティシア様、この料理は一体……」
やっと冷静になったのか、料理長が料理名を聞いてきた。
「これぇはハンバーグでち」
「ハンバーグ……レティシア様が考えた名前なのですね！　全てメモりました」
私が考えた名前ではないんだけれど、言っても仕方ないのでそういうことにしとこう。
「では今日の夕食は、ハンバーグをだしちぇくだしゃいね」
「かしこまりました！　お任せください」

この後、夕食にハンバーグが出されると、家族から大絶賛。
「なんだこの美味さは！　もう毎日これでいい」
「本当ですわ！　口の中が幸せで飲み込むのが惜しい」
「かかってるソースも美味しいね」
「うん最高においしー」
「うまい」
「ふふっ、僕は一番初めにレティと食べたんだよ！」
その後、料理長がいかに私がすごいかを熱く語るもんだから、家族から賞賛の嵐だった。
のちにこれはハンバーグ革命と言われ、ドンバッセル領で大人気のレシピとなる。

★

ハンバーグ革命から数日、私は毎日料理長のところに通い、新メニューをコツコツ増やしている。骨から出汁を取るようにして、スープも格段に美味しくなった。昨日出された新メニュー、オムライスも大好評だった。

二歳児がなんでこんなレシピを思いつくのかと、普通なら疑問に思われそうなもんだけど、ここはスキルがある世界。

「レティは食の神様の加護があるのかもね」で終わってしまった。

食い意地のせいで、後先考えずにハンバーグを披露したものの、その後の説明まで考えていなかったから、その設定は助かった。

だって美味しいご飯に飢えていたんです。おバカな食いしん坊の私、反省してます。

そんなこんなで、今日は私の三歳の誕生日！

午前中は盛大にお祝いしてもらい、午後からはお父様と一緒に教会に行って創造神様からスキルをもらうのだ。

コンコンと部屋のドアがノックされ、メイドとお父様が入ってきた。

「レティ、馬車の準備も整ったし出発するよ」

「あい！」

お父様は私を抱っこして外に出ると、そのまま馬車に乗った。

何げにお屋敷から出たことがないので、ドンバッセルの領地が見られるのは楽しみ。

馬車の中ではお父様の膝の上に座り、外の景色を楽しむ。

お屋敷でもお父様やお兄様たちが、私を抱っこして膝の上に乗せるのでもう慣れたけれど、初めてされた時は恥ずかしかった。前世でも、抱っこやハグなどされたことがないのだから。

でも大好きな人に抱っこされたり、こうやって人とくっついていると、幸せな気持ちになるんだなって発見した。

「わぁ！　すごいでち」

「ははっ、レティは領地を見るのは初めてだもんな」

ドンバッセル領は、想像していた何倍も人で賑わい栄えていた。

だけれど……なんだろう。ドンバッセル領の街の人ってあんな感じだったかなぁ。ゲームの中のNPCの姿はもっと普通だったような……歩いている人たちのガタイがいい。普通の服を着ているんだけど、そのいでたちは屈強な戦士のよう。

「あにょ……街にょ人たちって、みんな冒険ちゃや戦士とかでしゅか？」

「みんな普通の人さ。ただこの領は隣国が近いし、魔獣が大量にいる深淵の森が近くにあるからね。

ちょっと鍛えているかもだね」
……ちょっとどころではないような。なんならこの世界は世紀末で、ヒャッハーが登場しそうなガタイだよ。見た目は普通だけども。
「さ、教会に着いたよ。馬車から降りよう」
お父様は私を抱きかかえたまま、教会の中に入っていった。
そこで迎えてくれた修道女さんが、神父様のいるところに案内してくれた。
「ダスター神父様は、こちらの中でスキル神託の儀の準備中です」
案内された部屋に入ると、五メートルはゆうにある大きな創造神様の像があった。その姿は、腰まである長い髪に整った綺麗な顔。男性なのか女性なのか性別が分からないほどに、中性的で見惚れる美しさ。その横にマッチョ!? じゃない、神父様が立っていた。
神父様までガタイがいいとか、どうなってるのこの領!? 絶対に普通じゃない。
「ではレティシア様、こちらの創造神様の前に立ち、目を閉じてお祈りください」
言われるがまま前に立ったけれど、そもそも祈るってどうするの？
とりあえず目を閉じ、「創造神様～初めましてレティシアです」と自己紹介してみた。
すると目を閉じていても分かるほどに眩しくなる。創造神様が輝いているんだろうか？
そして脳内に直接【封印】【解放】という言葉？ 概念？ が入ってきた。
眩しさが収まり目を開けると、私の前に銅像と同じ姿をした、光り輝く創造神様が立っていた。

「え？」
驚く私のおでこにそっとキスをしたら、創造神様はさっと消えてしまった。
「お父しゃま！ みみっ見まちた!?」
「んん？ どうしたんだい、そんなに慌てて？」
お父様たちにはその姿は見えていないよう。彼らは不思議そうに私を見ている。
そうか私だけに見えたんだ。
「それでどんなスキルをいただいたんだい？」
「えっちょ、【封印】と……」
「なんだって、【封印】だって!? なんてレアなスキルだ！」
まだもう一つの【解放】を言い終える前に、お父様が興奮気味に言葉を被せてきた。
知ってはいたけれど、そんなに興奮するほどにレアなんだ。
興奮気味のお父様とは裏腹に、神父様は神妙な顔で黙り込む。
「レティシア様のスキルは【封印】だけではありませんね。もう一つ【解放】も……」
「なんだって!? スキル二つ持ちだと!? そんなの何百年に一人現れたらいい方だ。それがレティなんて……」
「これは目立ちますね。しかもその力を利用しようとする者たちも現れるでしょうね」
「ダスターよ。レティのスキルは【封印】だけだ」

「はい。分かっております。国にはそう報告しておきます」
お父様と神父様は真剣な面持ちで握手を交わしていた。
誰がどんなスキルを持っているのかは国が管理しており、報告義務がある。なんらかの事件があった時などに、役に立つ措置らしい。
私のスキル【封印】は使った相手のスキルを封印し、使えなくすることができる。【解放】はその封印したスキルを、自在に使うことができる。この二つが揃うと、最強と言ってもおかしくないレベルなのだ。過去に【封印】を持つ人はいたが、【解放】とセットで持っている人はいないのだとか。
だからお父様と神父様はあんなにも慌てていたのだろう。

その後、お屋敷に戻ると、家族会議が行われた。
「我らの可愛いレティにレアスキルが二つも現れた。このスキルを利用されないよう、我らでレティを守るんだ！　分かったな？」
お父様が拳を強く握りしめ、みんなを鼓舞する。
みんなもお父様と同じような熱い目をして、胸を力強く二回叩く。
「可愛いレティのため。なんでもしますわ」
「俺、もっと強くなる！」

「僕ももっと訓練いっぱいして強くなる」
「僕も」
「僕だって七歳になったばっかりだけど剣の訓練いっぱいする」
なんだかみんながメラメラと燃えている。私も頑張らなきゃ。

★スキル【封印】の出番

なんだかんだで私は六歳になった。
身長も伸び、料理をお手伝いできるようになったので、料理長と一緒に、毎日新しいレシピ開発に励んでいる。
そう。この世界に来て、ただ料理を作ったりお勉強したりしているだけで、強くなるようなことは一切していない。得たスキルを使ったことがないのだ。
これって良いのかな？　このままだと最強のラスボスになれない気がするんだけれど……
深淵の森に行き、魔獣や魔物のスキルを封印したりして、強くなった方がいいのでは？　と思った時にお父様に相談したら、『レティは小さいのに、そんなことしなくていい』と言われ今に至る。
まぁ、ラスボスになりたいわけではないので、このままスキルを使わずお料理したり、お勉強し

たりして過ごすのもいいのかもしれない。
「料理長！　今日は家族に大人気のトンカツを使ったアレンジ料理を作りますよ」
「あの最強レシピ、トンカツのアレンジ⁉　食の女神様に愛されているレティシア様のアイデアは、本当に素晴らしいですね！」
「えへへ……褒めすぎだよ」
「何をおっしゃいますやら！『レティ食堂』は毎日行列で、今やドンバッセル領で一番人気の食堂じゃないですか！　観光客の名物ですよ」
そうなのだ。いろんなレシピを料理長と作っているうちに、お父様が『レティの美味しい料理を領民にも食べさせてあげたい。そうだ！　お店を出したら良いんじゃないか？』などと言い出した。
そして、あれよあれよという間にレティ食堂が完成した。
レティ食堂は瞬く間に人気を博し、今は五号店を建設中だ。
そう、まさに今の私は食の無双をしている。
食に乏しいゲームの設定を知っているから、ちょっとズルをしているような気分。
「レティ、今日の料理はなあに？」
ジュエルお兄様が調理場にやってきて、料理の作業を覗く。
「ふふふっ、今日はこのトンカツを使った新メニュー、特製カツ丼です」
「カツ丼⁉　また新しいメニューだね。トンカツだけでも美味しいのに。今日の夕食が楽しみだよ」
「楽しみにしてくださいね」
「じゃあ僕は剣の稽古に行ってくるね」
十歳になった四男のジュエルお兄様は、以前の愛らしい姿を残しつつ成長した。剣と魔法のどちらにも実力があるらしく、この前もお父様から絶賛されていた。
長男のアレクサンダーお兄様は十四歳という若さで、周囲から『剣聖』と呼ばれるほど頭角を現している。
双子のリンネお兄様やネイトお兄様はまだ十二歳なのに、魔法師団に来ないかと勧誘されている。
お兄様たちの強さがやばい。もちろんドンバッセル領の騎士団の人たちの強さもやばい。
分かってはいたけれど、ドンバッセル領にいる人たちみんなが強すぎる。
……さてと、カツ丼作るぞー！

新メニューのカツ丼は、大盛況で終わったのだけど。
なんだろう、この重苦しい空気。
夕食後、大事な話があるとお父様が言い、私たちは席に座り、お父様の発言を待っている。しかし、そのお父様がなかなか口を開かない。
どうしたというのだ。するとようやく眉間に皺を寄せたお父様が告げる。

「……マーガレットには話したんだが、魔王が復活した」
え!?　魔王!?　この世界に魔王とかいるの？　ゲームではそんな話なかった。そもそもゲームスタート時にレティシアは十六歳なので、六歳の時期に起こるイベントなんて分からないんだけど。
「え!?　魔王復活!?　早くないですか」
「そうですよ！　前回に魔王が現れたのは百年前ですよね」
「魔王の復活って三百年周期だと文献に書いてありました」
「魔王早い」
お父様の言葉を皮切りに、お兄様たちが次々に声を上げる。
「お前たち落ち着け！　今回の魔王はさらに厄介なんだ」
お父様が声を荒らげ、お兄様たちが黙る。
さらに厄介ってどういうこと？
「今回現れた魔王は、数千年に一度現れると言われている、厄災の魔王だ」
「ちょっと待って！　嘘でしょ!?　ダクネル、その話は聞いてないわよ！」
お父様の話を聞いてお母様が声を上げる。
「厄災の魔王が現れると全ての国が滅びるって……」
「前回現れたのは三千年前……」
「そんな最強の厄災の魔王相手にどうやって戦えばっ」

お兄様たちが顔を青ざめさせ、動揺している。
ちょっと待って、そんなやべぇ魔王復活って……あれ？　私、スローライフを楽しむどころか、六歳で人生終わりそうなんだが。嘘でしょー!?
「その厄災の魔王討伐について、我がドンバッセル領に王命で依頼が来た」
王様ご指名!?　確かにドンバッセル領は、最強武装集団だとは思うけれど。
「どうしてですか!?」
「なぜドンバッセル領に!?」
「確かに我がドンバッセル領は、最強の誇りを持っておりますが」
「さすがに我が領だけで、厄災の魔王を討伐するのは無理かと」
「うん」
お兄様たちがさすがに無理だとお父様に詰め寄る。私も同感です。王様無茶振りすぎ。
「これには理由があるんだよ」
「え？　理由ですか？」
一番先に長男のアレクサンダーお兄様が聞き返した。私も理由が知りたいです。
「レティのスキル【封印】が理由だ。過去に魔王のスキルを【封印】で封じて討伐した文献が残っていたんだ。今この国でその【封印】を持っているのはレティだけ。だから我が領に魔王討伐の王命が来たんだ」

その言葉にみんながしんと静まり返る。
「だが封印したのは普通の魔王で厄災の魔王ではない……なので封印できる確証はない」
お父様の言葉に、みんなが再び動揺する。私も同じく動揺しているのだけど、私の場合はみんなとは違う理由である。
――えっ……ちょっと待って!?
てことはだよ？【封印】の力を魔王に使うってことは……
レティシアが最強になるのって、厄災の魔王の力を得たからじゃ……!?
「ですがお父様！　レティはまだ六歳ですよ!?」
四男のジュエルお兄様が私の肩を抱き、心配してくれる。
「そうですよ！　普通の魔王なら封印できるかもしれませんが、今回現れたのは厄災の魔王ですよ？　封印できなかったらどうするんですか」
アレクサンダーお兄様も、私のところに来て不安そうに私を見る。
お兄様、大丈夫ですよ。
みんなの不安げな表情とは逆に、私の顔は自信に満ち溢れていく。
「そんな危険な場所に、レティを連れていくのは反対です」
「うん、同意」
双子のリンネお兄様とネイトお兄様が、私を心配してお父様に詰め寄る。

お兄様たちが心配してくれる。
でも安心してください。私、そこで最強レティシアになるんです。
「私、厄災の魔王のところに行きます！」
ずっと沈黙していた私が発言すると――
「ほら、レティだって行くって……!?」
「「「「ファ!?」」」」
私のこの一言に、家族全員が口をあんぐりと開け、固まった。
だけど、安心してください。私、魔王のスキル奪うので。

★

厄災の魔王を私が封印すると言い出してから、あれよあれよと準備が進み。
今日は魔王討伐に行くための出陣式。
ドンバッセル邸にある騎士たちの訓練場所に、魔王討伐に行く精鋭たちが集まっている。
精鋭たちと言えば聞こえは良いのだけれど、見た目は筋骨隆々の強面(こわもて)ばかり。
街で会ったら絶対に目を合わせないレベル。七つの星を持つ男の世界で言うところの「ヒャッハー」なやつらである。

そんな精鋭たちがみな声を上げ、士気を高めているのだ。今から村を滅ぼしに行くんですかって思いそうだが、私はこの人たちが優しいのをこの四年の歳月で知っている。会えば私をレティシアお嬢様や姫と呼んで優しく頭を撫でてくれるのだ。

優しい騎士たちはちょっと戦闘狂なだけなのだ。……うん。

精鋭たちの盛り上がりが最高潮に達した時。

お父様が壇上に登場した。

「「「「ウオォォォッ!!」」」」

騎士たちの声で地面が揺れた。なんだこの盛り上がりは。

これから魔王討伐に向かうというのにこのお祭り騒ぎ、大丈夫？　死ぬかもしれないんだよ？

なのにその姿は、遠足に行くのが楽しみな子供たちのよう。

「これから厄災の魔王を倒す旅に出る。ドンバッセル領の赤き騎士たちよ、覚悟はいいか！」

ドンバッセル領では赤が領を象徴とするカラーとなっており、誰もが赤を身につけている。

お父様の強さに憧れ、燃えるような赤い髪と同じ赤の色を身に纏いたいと騎士たちが思い、始まったそうだ。

今やドンバッセルの騎士たちは、他領の人たちから『赤い強騎士』と呼ばれ、恐れられているらしい。

さらに領旗も赤、領の至るところで咲いている花も真紅の薔薇。ということで赤はドンバッセル

領には欠かせない色なのだ。

「「「「ウオォぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!」」」」

お父様の表明に鼓舞され、再び地面が揺れる。

どうなってるの、この集団。

「お前たち！　分かっているな？　この魔王討伐に、可愛い我が領の姫であるレティシアも一緒に行く。何がなんでもこの可愛い姫を守り抜くんだ。分かったな！」

「「「「イエッサー!!」」」」

お父様の言葉に、集まっていた精鋭たち全員が誓いの印――胸を二回叩き、頭を下げる。

その姿は神聖な騎士の姿に見え、ものすごくカッコいい。

てか可愛い姫を守るって、いやいやいや恥ずかしいです。

私は絶対に大丈夫って分かっているだけに、そんな心配はいらないんですよと言いたい。

もちろん言えないけれど……

「まぁ俺がレティのそばで守ってやるけどな」

「アレクサンダーお兄様」

私の横に立つ、長男のアレクサンダーお兄様が私の頭を撫でる。

「何言ってるんだよ、僕が一番そばで守るからアレク兄は最前線で戦えよ」

「リンネにレティを任せて大丈夫か？　お前に守り切れるか？」

「なっ、僕の魔法は最強なんだ。安心して僕に任せてね、レティ」
今度は双子の一人、次男リンネお兄様が私の肩を抱きしめ、自分の方に近づける。
「魔法なら私が最強」
「なっ、ネイトより僕の方が最強だ」
「それなら剣も魔法もどっちも得意な僕が一番だよ」
同じく双子の三男ネイトお兄様や四男ジュエルお兄様まで私の周りに集まる。
相変わらず兄たちの溺愛が止まらない。

出陣式を終え、魔王がいる魔国に向かって私たちは出発した。
魔国到着までに約一ヶ月くらいかかるらしい。
それまでは野営しながら進んでいくので、過酷な旅になると説明を聞いた。
初めての野営、両親や兄たちからそのことも心配された。
ご飯くらいは楽しみたいなと思ったので、今回の旅に戦闘要員ではない料理長についてきてもらって、私と料理長で美味しい料理を振る舞う予定だ。
魔王討伐とだけ聞くと怖い旅なんだけど、私からしたら初めての長旅。
正直ワクワクしかない。
私の野営の勝手なイメージは、キャンプしながらの移動だ。

そう！　前世で憧れてやまない、みんなでワイワイしながらキャンプ飯を楽しみ、知らない土地を開拓するイベント。
まさに最高すぎるシチュエーション！
前世では、もっぱら一人キャンプを楽しんではいたんだけれど、みんなでワイワイ楽しむキャンプにも少し……いやかなり憧れてはいた！
正直、一人キャンプにはその良さがいっぱい詰まってる。じゃあ大勢でするキャンプの魅力はなんだ？　って、したことがない奴からしたら気になるわけですよ！
「ふふふ……楽しみすぎる」
「へ？　レティ、何が楽しみなんだ？」
しまった、心の声がダダ漏れていた。
私の横に座るアレクサンダーお兄様が何を言ってるんだこいつ？　って目で私を見てくる。
そりゃそう。今から激しい戦いの場に行くのに、楽しみすぎるの発言は、戦闘狂の変態でしかない。
「あ、その……今日の夜ご飯のメニュー楽しみだなって」
「ああ、野営で美味しいご飯なんて出たことないからな。そうか、今日はレティのスペシャル料理が食べられるんだな。それは俺も楽しみだよ」
「ふふ。今日のご飯は自信作なので、楽しみにしていてください」

馬車に揺られながら道なき道を進んでいく。
激しい揺れで正直お尻が痛い。
もうそろそろ日が暮れそうなので、休憩になるとは思うのだけれど。
「よーし、今日はここまで。この場所で野営するぞ」
どうやら野営する場所が決まったよう。
お父様が大きな声を出してみんなを集めている。
百人以上はいる大集団の野営となると、準備も大変なんじゃと思っていたが、みんな慣れているようで、テントやらいろんなものがテキパキと荷馬車から下ろされていく。
よし！　私も頑張るぞ。
みんなが寝る場所の準備をしてくれる間に美味しい料理を作らなきゃ！
「料理長、私たちも料理の準備をしましょう」
「そうですね。やりましょう」
野営での料理は初めてで手探りなのもあり、今日は簡単な料理。
大きな寸胴鍋にいっぱいの具材を入れ、煮込む。
具材は『マジックバッグ』という、便利な空間収納の魔道具に入れてきた。
このバッグの中は時間が経過しない、便利アイテム。

このアイテムは迷宮でしか入手できないので、ゲームをしていた時もこれを手に入れるために迷宮に潜る人がいっぱいいた。
そしてそこはさすが最強を誇るドンバッセル領。
赤の強騎士たちが迷宮に潜り、マジックバッグを入手したんだとお父様が教えてくれた。
私が使っているのは一番大きなサイズのマジックバッグだ。
かなりレアなマジックバッグ、それが二個も!!
この中には大人五人くらいは余裕で入れる大きさ。
マジックバッグの中は全て食材。
百人の一ヶ月分の食料なんだもん。たくさんなくっちゃね。
日持ちする野菜などは馬車にも積んであるし。準備は万全なのだ。ぬふふ。
スープをコトコト煮込んでいる間にメインの準備。
今日は唐揚げ！　この世界の住人は料理を揚げる工程を知らない。
なので初めてお父様たちに唐揚げを作った日は、みんな涙を流しながら食べていた。
唐揚げの仕込みは終わっているので、あとは揚げるだけ。
量が多いので料理長と手分けして、大きな鍋に油を投入してジャンジャン揚げていく。
するといい匂いが一気に広がる。
テントを作りながら騎士たちやお父様たちがこちらをチラチラと見ている。

香りの爆弾にやられた模様。
もう少し待っててくださいね。
「料理長、一気に揚げますよー」
「はい。美味しい料理を作りましょう」
完成したスープとメインの唐揚げ。それにパンを添えた食事を、一番初めにお父様のところに持っていく。
「お父様、どうぞ」
「レティ、ありがとう。野営でこんな美味しい料理が食べられるなんて、ここは天国かな？」
お父様、ここは魔王城に向かう道中のただの森ですよ。
お父様が唐揚げを口に入れると、サクッといい音が聞こえる。
「はぁぁぁっ！　何度食べてもレティの唐揚げ最強！」
お父様の声を聞き……
「姫っ！　俺たちもう我慢できねぇっす」
「唐揚げを、姫っ」
「姫、よだれが止まんねぇっす」
「唐揚げ姫！」
「唐揚げ姫ぇ～！」

いっせいに騎士たちからの唐揚げ食べたいコール。
てか唐揚げ姫ってなんぞや。もはや私が唐揚げになってる。
というわけで、初日のご飯は大成功に終わった。
よかった。みんな喜んでくれて。

★もふもふ

魔王城への旅も一週間が過ぎた。
今のところ……正直な気持ち、この旅はめっちゃ楽しい。
怖いこともないし。いや、魔獣などもちょこちょこ出るんだけど、赤い強騎士たちがサクッと討伐してくれるので、食べられる魔獣だと食料が増えて嬉しいくらい。
この前現れたオークキングの肉なんて、最っ高に美味しかった。
あれをカツにして食べたんだけど、モチッ、ジュワーっと口の中に幸せが広がりすぎてやばかった。
この世界では強い魔獣ほど美味しいのだ。
また食べたいなぁ……

「ふぇ!?」
馬車が急に止まり、体が椅子から落ちそうになるのを、ネイトお兄様が抱き止めてくれた。
「大丈夫？」
「はっ、はい。何かあったんでしょうか？」
「ちょっと僕が様子を見てくるよ！　ネイトとジュエルはレティのそばにいて！」
「うん」
「リンネお兄様、気をつけて。ここは僕たちに任せてね」
リンネお兄様が馬車から急いで降りていった。
何があったんだろう。
なんだろう……少し怖い。
ネイトお兄様とジュエルお兄様が、私の両横に座り守ってくれているので、怖さが半減しているものの、なんとも言えない胸騒ぎがして鼓動がどくどく鳴り響く。
――リンネお兄様が出ていった数分後。
ものすごく大きな音が鳴り、強騎士たちの荒ぶった声が聞こえる。
何が起こってるの!?
強騎士たちが苦戦するほどの強い魔獣が現れたのだろうか？
馬車の窓から外の様子を窺(うかが)おうとした瞬間。

強い衝撃と同時に馬車は横転し、私は外に放り出された。
「いたたっ……」
無防備な状態で、地面に体を思いっきり打ちつけ、かなりの痛みが襲ってくる。
一体何があったの……!?
「ぎゃっ!?」
目の前が大きな影に包まれたと思ったら、次に私の視界に入ってきたのは、五メートルはゆうにある大きな真っ白い狼？　そいつが私の体をまたぐように真上に立っていた。
こんな大きな狼の魔獣見たことない！
お父様やお兄様の叫び声が聞こえる。
何が起こっているのか理解できないけれど、どうやらお父様たちは私に近寄れないみたいだ。
少し離れたところで、必死に叫びながら接近を試みるも一向に無理なよう。
この目の前にいる白い狼が何かしているんだろうか？
それより……怖いはずなのに、なんで私はこんなに冷静なんだろうか？
人は死を間近にすると、落ち着くものなんだろうか。
お父様たちの助けが来る前に、きっと私は噛み殺されるだろう。
「ん？」
ちょっと待って、怖いはずなんだけれど落ち着いている理由。

それって、この狼のホッとして安心する匂い……そう、毎日嗅いでいたあの癒してくれる……
『あるじぃ！　やっと会えた。わりぃはずっとあるじを探していたでぢ！』
え、え、え!?　目の前の大きな獣の声が聞こえる。
何これ!?
『やっとあるじの匂いがして、慌てて走ってきたでぢ！　わりぃは嬉しいでぢ』
大きな獣が私の顔に近づき、その顔を擦りつける。
待って!?　この匂いに、この顔！　知ってる！
「あなた……もしかして、おもち!?」
『そうでぢよ！　やっと気づいてくれたっぢ。あれ、なんかあるじ、小っさくなってるでぢ』
「いやいや、おもちがデカくなってるんだってば」
『ふぇ？　わりぃが？』
「そうよ！」
『ありぃ？　あるじとお話しできてる？　なんでぇ!?』
いやいやいや、それは私のセリフだよ、おもちさん。
なんでこの世界にいて、さらになんでそんなでっかくなってるんですか？　で、なんで話せるんですか？
そもそもおもちは、私の腕の中にすっぽりと収まる小さなポメラニアンだよね？

なんでポメの見た目のまま、そんなにデカくなってるのよ。
「レティ、今助けるからな！」
「逃げるんだ！」
お父様たちが私を守るため、必死に攻撃しようとしている。
だけど、おもちが無自覚にバリアを張っているのか、私たちの近くにいまだ誰も近寄れない。
「おもち何かしている？　周りの人が私たちのところに近寄れないみたいだけど」
『んん？　あるじとの再会を邪魔されたくないから、誰も近くに来られなくしてるっち』
「そんなこともできるの？　おもちすごい。この世界に来てなんかすごい能力を得たの？」
『んん～？　よく分からないっちけど、わりぇは思ったことができるんでち』
思ったことができる？　おもち最強すぎない？
とりあえずおもちが安心できる獣だとお父様たちに説明したい。
「ねぇ、おもち。私たちの周りで必死に声を上げている人たちがいるでしょ？　あの人たちは私の大切な家族なの。すごく心配しているから、おもちが安全だって教えてあげたいんだ」
『あるじに家族ができたっち？　それは最高でち。じゃあ近寄っていいでち』
おもちがそう言った途端、お父様たちが走り寄ってきた。
一斉におもちに向かって攻撃を仕掛けてきたので、慌てておもちの前に立ち、叫ぶ。
「お父様！　みなさま、この魔獣は安全です。何も問題ありません！　私に懐いているので、攻撃

しないでください」
私がそう言っておもちに抱きつき、お腹を撫でる。すると、お父様、お兄様たち、強騎士たちが固まり、なんとも言えない顔で私とおもちを見ている。当のおもちは嬉しいのか、尻尾がフル回転で揺れ、突風を巻き起こす勢い。
あれ？　そこまで変なこと言ってないと思うんだけど……
「レレレッ、レティ？　フェンリルを手懐けたのか？」
お父様が震える声でどうにか言い、おもちを指差す。
ふぇ⁉　フェンリル？　何言ってるの？
フェンリルって文献に記載されている最強の聖獣ですよね？
おもちは大きくなっただけで、ポメラニアンだよ？
「レティ、よく聞いてくれ」
「はい」
お父様が私の前に立つと、おもちと私を交互に見て頭を左右に振る。
その仕草が、この状況はありえないと言っているかのよう。
「そこに座って尻尾を振っているフェンリルはね、犬みたいな扱いができる存在じゃないんだよ。強さは未知、討伐した話も全く聞かない。出会ったら終わりなんだ。それくらい恐れられている存在なんだ。過去に救世の聖女様がフェンリルを手懐け、使役していたってのは文献に残っているけ

れど……まさかレティたんが聖女様と同じなんて……」
お父様が真剣な顔でフェンリルについて教えてくれるのだけれど、フェンリルってこんな見た目だっけ？　文献で見たのはもっとイカつい顔だったような……あとレティたんってなに。
初めは大きさに驚いたが、まんま前世と同じポメ姿のおもちは可愛いでしかない。
「ねぇ！　おもちってフェンリルなの⁉」
『ぬぅ？　わりぇが？　よく分からんでち』
おもちに聞いてみるも、可愛いポメの仕草――首を傾げるだけ。
はぁ、大きくなっても可愛い。私はおもちのお腹に顔を埋める。
「お父様、このおもちは本当にフェンリルなのですか？　こんなに可愛いんですよ？」
「おもっ⁉　おもちぃ⁉」
お父様の声が裏返る。おもちの名前がそんなに変？
まぁ、この世界におもちってないもんなぁ。真っ白いふわふわの体毛、それが丸くなって寝ているとおもちそっくりなんだけどなぁ。
「ゴホンッ。早くもフェンリルに名前をつけたんだね。その白銀の体毛、深い深緑の瞳。それを持つ存在は、この世界でフェンリルしかいない」
「え、白銀の体毛を持つ生き物は、フェンリル以外存在しないのですか⁉」
「そうだよ。それに圧倒的魔力。肌で感じ取れるし、ビリビリと伝わってくるよ」

確かに、ビリビリとまではいかないけれど、温かくて心地よい何かに包み込まれているよう。これがおもちの魔力なんだろうか。
「ねぇおもち、お父様たちがおもちの魔力をビリビリ感じてしんどそうだから、抑えることってできる？」
『ぬぅん？　抑えりゅ……これでどうでち？』
おもちが魔力を抑えてくれたようだ。
「お父様、おもちが魔力を抑えてくれたみたいなんですが、どうです？」
「お……確かに。フェンリルに対して怖さがなくなったな」
『今のわりぇに、できないことなどないでち！』
おもちがドヤァ～ってふんぞり返っている。こんな時はご褒美のなでなで待ちなんだよね。私の方をチラチラ見てるし。
「プククク……」
ほんと可愛いなぁ。姿は大きくなっても、仕草や中身は前世の時とおんなじ。
思いっきりおもちを撫でまくっていると、お父様が「今日はいろいろありすぎた……少し早いがここで野営にするか」とみんなに伝えていた。
確かにフェンリルおもちの登場は、みんなの度肝を抜いただろうしね。
騎士たちが一斉に野営の準備に取りかかっている中、お兄様たちが私の周りに集まる。

「いや、まじでレティにはびっくりさせられたよ」
驚きまじりに話しながら、アレクサンダーお兄様が私の肩を軽く叩く。
それを皮切りに他のお兄様たちが一斉に話し始める。
「本当だよ！　レティが死んじゃうかと思ったんだよ」
「助けに行こうにも、どうやっても近寄れないし、心配したんだからな」
「うん。心配した」
お兄様たちが涙目になりながら一斉に私を抱きしめる。
「「「本当助かってよかった……」」」
心配かけてすみません。
お父様やお兄様たち、それに騎士の人たちみんなが、私を助けようと必死になってくれてたようだ。
なのに、おもちといちゃいちゃしててすみません。
「とりあえず、レティは最強のボディガードを得たね」
リンネお兄様がウインクしながら茶化してくる。
「フェンリル以上のボディガードなんていないよね。さすがレティだよ」
ジュエルお兄様が私の頭をヨシヨシ撫でる。
「よし、じゃあみんなの手伝いに行くか」

立ち読みサンプル
はここまで

アレクサンダーお兄様がそう言うと――
「「はい」」
お兄様たちはやっと安心したのか、テントの設営を手伝いに行った。
じゃあ私は料理長と今日のメニューの準備に取りかかりますか！

『あるじぃ、何ちゅくってるっち？　いい匂いがするっち』
おもちが作業台に顔を突っ込んできた。
フワフワの体毛が火で燃えちゃう！
慌ててておもちを少し後ろに下げる。
「今日はね、ステーキ！　ワイバーンのステーキだよ」
『ステーキ？　なんでち？』
「ふふふ、美味しいお肉ってこと」
『うんまい肉！　楽しみでちぃぃぃぃっ』
おもちがその場で飛び跳ねる。嬉しい時やご飯の前のおもちの癖なんだけど、今のデカさでそれをされると、地面が揺れて料理ができない。
「おもち、嬉しいのは分かるけど、落ち着いて？　地面が揺れて料理ができないよ」
『ぬぅぅん……分かったでち』